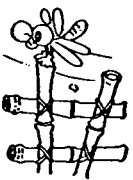


教育現場で思うこと(三)

成末肇士



数決で国の政治を行なう制度です。個人の「快」を一つ一つの票

「善い世の中」とは、「快い世の中」つまり、「便利な世の中」とか「能率の上がる世の中」とか、技術の高度に発展した世の中」と考えれば、これはいくでも科学的に計算できます。どれくらい快いか、快くないか、長続きするかしないか、みんなにとって快適かそれとも一部の人だけに快適なのか、といったことなら科学的に計ることができる。そして、科学的に計った上で、いくらでも新しく工夫して開発していくことができます。ペンサムはこう主張したので、これが「功利原理」です。功利というものは「快いこと」「快楽」を増進する力ということ

時はちょうど、イギリスで産業革命が始まった頃でした。このペンサムの「功利原理」は、人々の心をとらえました。そして、その後、現在に至るまで世の中で主流の考えになっていきました。社会科学、経済学、政治学、社会学、もちろん教育学も、あらゆる分野で「善い」「快さ」の満足を増大が根本だとされてきました。

一例をあげてみましょう。今日私たちが、あまり疑問に思わない代議制民主主義を考えてみます。選挙によって代議士を選び、その代議士の党派の力、多

集団疎開(深)

人見数良

大阪に居たら全く体験出来なかったはずの農作業や、山村ゆえの作業も随分やらせて頂いたことは本当に思いでと

着いて間もなくのこと、新食堂の屋根材の竹の切り出しに山へ行ったことから始まり、次の日のそば畑の手入れと続き、稲刈り、そば刈り、開墾、きのこ採り、芋掘り、柿とり、柿の皮むき、炭焼きの木材運び等々と枚挙にいとまがない程の都会育ちには貴重なワイルドな体験をさせて頂いた。今でも断片的には鮮明に思い出す。

ワイルドと云えばある日、芋掘りに山の畑へ行ったとき、隣の畑が乱暴に掘り返してあったので、何も判らず「収穫したあとですか」と聞いたら「昨夜猪にやられた」と聞き、生活のすぐそばに野性の獣が居ると聞いて体が震えた。又、屋敷さんが持って来て下さった兎の刺身をおそろおそろ

てやる知識は、しばしば、私たちが大学で、社会学とか政治学だとかで学んできた「功利原理」によって成り立ったものなんです。従って熱心に教育すればするほど、いつの間にか子ども幼い心に功利主義をふきこむことになってしまふわけです。これは考えてみれば恐ろしいことです。以下次号

た。寒さと風と粗末な食事で身体も弱っていた。飲料水も悪く、生水を飲めば下痢、血便が出るようになった。みんな炭を粉末にし、下痢止めの薬としていた。食べ物も、ほんの少しの食パンと小豆の入った粥かコウリヤンで、「めし」という程のものではなかった。

収容所での作業は、建築、農園、炭鉱があり、私は建築作業に行く事になった、家を建てる基礎工事の穴掘りをするのだが、約一メートルも凍った土を掘るのだからたまに凍ったものではない。

毎朝人員点呼があるが、氷点下三十度の所で一時間から二時間間もかかってしまう。ソ連兵が数をよう数えないので、何回もやり直すからである。防寒帽を被っていても、息がかかるとすぐさま凍りついて眉毛といわずまつ毛といわず「つらら」がぶらぶら下がる。

一月は午前十時頃に太陽が上がり、辺りが明るくなるが、午後三時ともなるとすぐ薄暗くなる。風が多いのには、みな寒に困っていたものだ。風が身体からいなくなると、不思議に二・三日でその人は死んでいった。

二月末頃からは、墓地に穴を掘りに行くのが毎日の作業日課となった。であった。文字どおり里にうつった私達は、軍国少年として健気であった。

日記の中に「淋しい」とか「家族に会いたい」と云った者が居たという記述は殆どなく、戦果のことを書き、僕等が頑張りなばと書いています。日記には食べ物に関する記述が多いが、後年他県へ疎開した人の話を聞くと、私達とは大違いで、深へお世話になった私達には大変恵まれていて、深の人達には本当によくやって頂いたと思う。

私達三十七名は六年生であったため、五ヶ月あまり経った昭和二十年二月二十一日、思い出た感謝を一杯つめた荷物と共に深を後にした。今でも深の人達には心から感謝している。



凍った大地に一名ずつの墓穴を掘る。ツルハシが仲々たたない。死亡者があまりにも多人数なので、少しの間小屋に置いていたこともあった。更につらかったのは、死者の着ていた服を脱がせ、丸裸にして埋めた事で、その服は後に残った者が着るのである。

- 十一月町内各種団体行事予定
- 小学校(幼) 二言
- 市P連バレー大会 二言
- 集金日 就学時健康診断 七言
- 貯金日 二言
- 一次発表会 二言
- 誕生会 三言
- 学習発表会 三言

- 消防団 九百一十言
- 秋季全国火災予防期間
- 大実戦訓練 三言
- 機械器具点検 三言
- 上級幹部研修会 三言
- 子ども会 三言
- 創作大会(リッジ) 三言
- 女性会 三言
- 親睦会 十一言・十一日・下七言
- 役員会 三言

十月初旬、NHKラジオ「いきいきホットライン」全国放送(録音)で、本誌三十八号(六号)に寄稿された坪見博文さんの「パツイチ人生」が女性アナを通して全文放送されました。

テーマは「離婚とその後の人生」。深刻な問題を軽妙なタッチで書かれた文章は、説得力のある人生論でした。

十月五日 敬老会に招かれて小学校へ。七十才以上の招待該当者が、男六十一名・女九十名の計百五十一名。深町総人口の一五・四%。当日の楽しみは熟年者の元気な笑顔がみられたこと。小学校高学年による校歌の斉唱。女性会の皆さんの熱演に「おひねり」のプレゼントも。十月二十六日 小学校主催のテクテクハイイクで御調坂へ。保護者を含め四十名ばかり参加した。少し汗ばむ絶好の日和に恵まれた半日。あめ湯とキャンディーのプレゼントが。

十月二十八日 小学校六年生が校長先生に引率されて稚子峠へ。その昔、生活苦から人口調節の悲しい役目を果たしたとの伝説ある「赤子石」は、飽食の現代ではとても考えられぬ。昔の子供は「よく学びよく遊べ」で育てられた。これは、現代にも通ずることではなからうか。敬老会の祝辞で「朝日に礼拝する人はいない」と言う趣旨の言葉を重く聞く。九月・十月は、老若の「遊び」に数多く参加する機会があり、多数の方が参加された。そこには活気と笑いがあふれた。



人生雑感

船本輝明

今回深郷土誌編集室長より、「ふかまちのまど」に連載予定の深町の歴史余話に絵の挿入依頼がありましてお受けした次第です。よろしく御付き合いの程お願い申し上げます。

少しでも目の保養となれば幸甚ですが、全く自信がなく半分不安な気持ちで挑戦してみたいと思います。

絵を描き初めて長いのですが、人物画は今五年位自己流でやっています。深でも多くの方々をモデルとして描かせて戴きました。その度毎が初めてと言う感じでキャンパスに向かいます。が、会心の作と言うのはまだ一作も出来ません。生涯の挑戦となるでしょう。

人生も早古希の歳となりまして、何時の間にかこんな年になったのか不思議なくらいです。男性は平均年齢七十七歳と言いますので、まだまだ急がずに千点位いは絵を描くことができるでしょう。

深町の歴史余話(一)

地名について 高崎壽郎

文政二二八九年の深村の古地図には次のような地名がのっている。

上組は馬路、清国、鳴瀬。中組はキタガ峠、頼貞、中溝、干川。下組は迫、カジヤである。

現在の地名はいつの時代に付けられたか不詳だが、明治三二二八九年、土地台帳付地図ができた時には明記されており、以来約百年間はこれを呼称している。

次に特徴的な地名について書いてみたい。

前出の馬路は今の高下、西側に当る。鳴瀬は大川(壱山)の流れてきたからこの地名が付いたのだからか。今は鳴瀬は成瀬になっている。

阿弥陀平にはかつて立派な阿弥陀堂があり、現在金剛寺本堂にある藤原時代の中期の作といわれる来仰阿弥陀像三体が安置されていたという。



よくできているのは、中組の龍王である。ご存知のように干魃の時雨乞いをする山である。この山はどの村にもあったようであるが、村で一番高い山と

私は夜寝るのは早く七時頃から、朝は四時に起きて六時頃まで一気に描き上げて、昼間は縁を作るのが日課なのです。

お暇な時には遊びに来てください。年寄ると人のお喋りも重要な生き甲斐となって来るものです。

今年からは敬老会でも御招待を戴いて、仲々楽しい時間を過ごさせて戴きました。

高齢化社会は、人と人の交流の要求される時代であると思えますよ。「喜怒哀楽は人生の常道」等と言っている内に何とかなるでしょう。



はかぎらない。深の場合、八幡宮(掛越)の裏山が龍王の山頂だったから都合良かったと思う。

次に如水館高校が平成六二九年に、龍王と白土山の地名の所に移転してきた。白土山は、最近まで藨草を染める良質の白土を産していた。アルミナ、シリカ、白土山とはよく考えた地名である。尚、終戦頃まで、すぐ近く(深郷土誌)で麻石州瓦によく似た瓦が焼かれていたとの事。

下組には、金堀、金売の地名がある。近くに鉱脈があり、鉱物を採掘し販売していた名残りと思われる。

久山田との境付近に「平地」という地名がある。ここには、昭和四〇年頃まで住居があった。さて、地図には載っていないが、射場という地名が上組にある。その昔、武士が弓を射る練習場だったといわれている。

かつて深を治めていた地頭職石原氏の菩提寺 医王山正光寺は、中組の松秋誠治氏宅付近にあった。それもあってか「正光寺に行く」という意味だった。へ行くという意味だった。

城主の屋敷地は、周囲の堀の内側に土塁を築いたので「堀の内」とも「土居」とも呼ばれた。中組土居講の崎土居昭二氏宅付近に、石原氏が居住していたと

くる人が多くなってきた。平成五二二九年には峠を分けて中峠がで平成九二二九年には、東峠から新たに南峠が誕生した。

又、菊の花咲く頃が訪れました。十月二十八日、浄泉寺様をお迎えして、故梶谷良夫の一周忌法要を営みました。存命中は、皆様方にいろいろとお世話になり、こゝをかりて厚く御礼申し上げます。

一周忌にあたり亡き主人のこのことについてふれたいと思います。退職後の想い出をたどって見ますと、一番私が嬉しかった事は、主人が寫経をすると云った事でした。それを聞いて私も大賛成でした。その時の言葉で「お父さんは字が上手だから、必ず良いものが出来ると言います」と言い、「たいいてい長い物を書いておくと後の方が崩れるものですが、それがなく私も感心している」と申しました。

それから何日か経て、寫経しているのに気がきました。先ず正信偈を寫経し、次いで阿弥陀經、歎異抄と、一つは阿弥陀經を掛け軸にしたことでした。之は二千字以上もあり大分時間もかかったのではないかと思います。

そして歌願寺出版の「よま」の集まりに「晩照」と名づけて、つづと自費出版差し上げて、そして、準備をしそれをみるてしまいま病院でも護婦さん私にはのくら私にはやらない仕事がないと、申し看護婦さんたか覚えて私第三集もお手伝いし、過去帳の整理等門徒が多いので大分日時もかかった様でした。

考えてみますと主人は、自分の余命がある程度満足していたのではなかながと思っています。大病を持ちながら長命さして頂きました事は、御仏のご加護と感謝して居ます。

又、私は北海道、ハワイ、ヨーロッパと旅行に連れて行ってもらいましたので、思い出を大切に、生きる支えとしたいと思っています。 合掌

一周忌を迎えて

よまを作ったのは本大部集まった「晩照」と名づけて、「白光」にて親戚知人にいた様です。第三歌集を出していましたがことなく逝ってしましました。看護婦に、「看の残りの時間いあるかな?」なればなら残っているのていまして。んはどういたしませんか、の事だなどと私第三集もお手伝いし、過去帳の整理等門徒が多いので大分日時もかかった様でした。

考えてみますと主人は、自分の余命がある程度満足していたのではなかながと思っています。大病を持ちながら長命さして頂きました事は、御仏のご加護と感謝して居ます。

又、私は北海道、ハワイ、ヨーロッパと旅行に連れて行ってもらいましたので、思い出を大切に、生きる支えとしたいと思っています。 合掌

春夏秋冬

石井春風

- 一、空は紺碧、白い雲 罫りを山に 巡らした 盆地の中に どころりと 大きな山が 座ってる ここは深町別天地
- 二、雌滝雄滝を 源に 母なる川よ 藤井川 鮎(あ)や目高を 遊ばせて 田圃をだいて 流れゆく ここはふるさと別天地
- 三、谷という谷 池があり よくも手堀で 掘ったもの 肩に担いで 土運び 先人達の 汗光る ここはふるさと別天地
- 四、春は花々 咲きついで 丘の果樹園 爽やかに 日に日に太る 青い実よ 梅桃李 梨に柿 ここはふるさと別天地
- 五、名の出た物に 黄西瓜 ずいき 里芋 うまい米 秋は松茸 山の幸 柿は 日本一の味 ここはふるさと別天地
- 六、病める人には 思いやり 弱い人には 手を貸して 老いをいたわり 慰さめる 言葉優しく 情けあり ここはふるさと別天地
- 七、山陽道の 長い谷 谷の詰めは 深の山 稚子峠に きたが峠(たお) 深とは よくも言ったもの ここは不加村別天地
- 八、歩みを止めて 見上げれば あれが 「備後の夫婦山」 登り降り の 旅人が 仰いだまの 旅にて ここは不加村別天地
- 九、北に禅宗 金剛寺 南は城山 田屋城址 兵(へ)どもが 夢の跡 一度登って みませんか ここはふるさと別天地

石井 春風 〓 本名石井良雄 〓 なたがの時に描きつけていたはずか。春風 〓 さんの二筆です。 〓 平成九年六月



町内会連合会

恒例の秋祭り、町民の皆様多数のお参りで盛会裏に終わることができました。

協賛演芸大会では、深小五・六年生と如水館高校野球部が初参加で会を盛り上げてくれました。

宮入費につきましては、多額の出宝有難うございました。厚くお礼申し上げます。

お 礼

去る一〇月一〇開催されました市民体育大会に多数(約三三)名ご参加して頂き有難うございました。

新たに深町にお出での皆様のお姿が目につきました。深町の新しいエネルギーとして頼もしいことです。

クラス順位は僅差で四位。来年が楽しみで。